

第5節 群馬県内出土紡錘車の編年

はじめに

矢田遺跡では、県内最高の100個以上の紡錘車が出土している。詳しい研究の行われていないこの紡錘車を理解するために、これまでに県内の遺跡を対象として1100個以上を資料収集し分析や若干の考察も行ってきた。その成果により矢田遺跡では特別に多くの紡錘車を使い、糸生産をおこなってきたかが次第に明らかになってきた。^(注)このことは当遺跡の最も大きな特徴のひとつである。整理事業最終年度にあたり、ここに紡錘車の理解を深めるために編年図と簡単な説明文を掲載し、今後の遺跡理解のための研究の一助としたい。

1 年代観の問題

出土した紡錘車がどの時代や時期に属しているのかを知るのは、最も基本となることである。しかし紡錘車自体に独自な年代観が確立されいるわけではないため、伴出する土器を中心とした遺物から年代観を与えることとなる。この遺物の年代観は時代や研究者により必ずしも一致していないことが多い。そこで基本的には報告書に記載されている年代観を採用し、記載されていないものについては筆者が決定した。筆者の年代観は、古墳時代の前期から後期までは『矢田遺跡VI』1996、奈良時代・平安時代については従来のものに加え、本報告書第7章第3節「矢田遺跡周辺における古墳時代後期から平安時代の土器について」の中で明らかにしている。

2 形の問題

古来より、紡錘車の形については外形の特徴から円筒形・截頭円錐形・円盤形・偏平円盤形・饅頭形・笠形・算盤玉形・碁石形等区別され呼称されてきた。どのような呼称が最も適当なのかはわからないが、ここでは新たな試みとして比較的わかりやすい断面形態での違いに注目し、以下の名称で呼称することとした。紡錘車の中で最も多い截頭円錐形は断面形が台形である。厚いものと薄いものがあるため、薄台形と厚台形とに分けた。円筒形や偏平円盤形は断面形が長方形と思われる。饅頭形と笠形は断面形が三角形と思われる。算盤玉形は断面が菱形である。台形の狭い面の径と広い面の径を広径・狭径とし、厚さの違いを分類の基準として三角形・長方形・厚台形・薄台形・菱形の5種類とした。以下使用する形態とは断面形態を意味する。なお菱形は近畿と九州の一部しか現在のところ出土していない。形の決定は視覚では一定性に欠けるため、次のような数式をパソコンに条件設定し自動的に決定できるようにした。

If ((広径 ≤ 0) or (狭径 ≤ 0), "", If ((広径-狭径) ≤ 広径/10, "長方形", If ((広径-狭径) ≥ 0.7 × 広径, "三角形", If (厚さ/広径 ≥ 0.4, "厚台形", If (厚さ/広径 < 0.4, "薄台形", "E")))))

3 紡錘車の編年

出土する紡錘車に共伴する土器から年代観を与え、形の良好に残っている215個を選択し、編年図を作成した。紡錘車の区分としては材質と形態の違いを用い、石製品は緑色・土製品は橙色をもって表現し視覚的に紡錘車の変化が理解できるように試みた。

そこから導きだされた結論はこれまで詳しく述べてきたことと当然ながら一致している。そのため内容的に重複するが、編年図から観た紡錘車を中心として、簡単に説明する。

(註)

弥生時代

前期の遺跡は極めて少ない。安中市注連引原遺跡で環濠集落が確認されているが、紡錘車の出土は報告されていない。

中　期

一部前期後半の要素を持つ中期前半の遺跡として吾妻町岩櫃遺跡・藤岡市沖II遺跡・群馬郡倉渕村上ノ久保遺跡がある。いずれの遺跡からも紡錘車の出土は報告されていない。中期前半の前橋市庚申塚遺跡・富岡市小塚遺跡では紡錘車の出土は報告されておらず、県内において紡錘車が出土するのは集落遺跡の増加する弥生時代の中期後半からである。勢多郡粕川村西迎遺跡で3個（その中の32号住居からは2個）と高崎市新保遺跡114号住居の計4個が出土しており、その形態はすべて長方形で、材質は土製である。長方形を呈する石製の紡錘車と三角形を呈する土製と石製の紡錘車はいまのところ確認されていない。

中期前半以前の調査例は少なく、県内でどの段階から紡錘車が使用されてくるのか現在のところ不明である。今後の調査で中期前半以前の紡錘車の出土に期待したい。

弥生時代後期～古墳時代前期（土師器と弥生土器の混在する時期）

集落数の増加とともに133個（形不明16個含む）と多く出土している。弥生時代の特徴である三角形と長方形を呈する土製の紡錘車がこの時期ではだいに減少し、古墳時代以降に主流となる薄台形と厚台形が増加してゆく段階である。しかしこの段階では約7：1の割合で弥生時代の主流である三角形や長方形が多く、薄台形や厚台形は少ない。材質は圧倒的に土製が多く石製は117個中わずか9個である。

紡錘車が多く出土するのは、多くの弥生時代土器を伴う段階であり、S字状口縁甕を主体とする段階での出土は少ない。このことは、S字状口縁の甕を持つ段階の集落が多く確認された新田町下田中遺跡で、ほとんど紡錘車が出土していないことからのものその傾向が伺える。

三角形は10個出土し土製が9個で石製が1個である。飯土井二本松遺跡では側面が段々畠状に整形されている。

長方形は92個出土し土製が88個で石製が4個である。県内東部の遺跡では十王台系の土器を出土する遺跡があり、そこから出土したものは土製であり、上下や側面に円形刺突紋やその他の文様が刻まれている。有馬条里遺跡2では骨製の物が出土しており、県内唯一の例である。

薄台形は7個出土し、土製が5個で石製が2個である。石製の材質は蛇紋岩と滑石片岩である。この時期以降石製の薄台形が主流となってゆく。

厚台形は8個出土し、土製が6個で石製が2個である。石製の材質は蛇紋岩と軽石である。薄台形同様この時期以降石製の厚台形が主流となってゆく。

古墳時代

紡錘車の歴史の中で最大の変革期である。従来の三角形と長方形が薄台形と厚台形に変化し、材質が土製から石製に変化する。

中　期

三角形は前期の4個から1個に、長方形は29個から4個に減少し、この時期以降主流となる薄台形は6個から24個に大きく増加している。材質では前期の土製が38個から4個と減少し石製は6個から29個へと大きく増加している。また弥生時代～古墳時代前期までと古墳時代中期～平安時代までの2時期区分で見ると以

下の表の様になる。

第20表 時代別形態比較一覧表

	三角形	長方形	薄台形	厚台形	鉄	合計
弥生～古墳時代前期	10	95	7	8	0	120
古墳中期～平安時代	0	44	297	217	97	655
合 計	10	139	304	225	97	775

後期前半

平安時代前期の224個と奈良時代の176個に次ぐ157個を出土する時期である。この段階から鉄製の紡錘車が登場する。どのような形で鉄製が導入されてゆくのは明かでないが、珍しい例として高崎市石原稻荷山古墳の出土がある。これは紡輪部分は石で作られているが、中心棒である紡茎部分に鉄が使用されて、鉄と石が合体して一つの紡錘車が作られているのである。現物を見る機会はまだないが、紡輪部分の茎の大きさに興味がある。通常石製の紡錘車は、中央に紡茎を差し込むために穴が開けられており、その径は6～8mmが多い。鉄製の紡錘車の紡輪の径は鋸びていて不明瞭な物が多いが、4mm前後が多いようである。そのため仮に直接紡輪に紡茎をセットするなら穴は小さいと思われる。鉄製は後期から細々と使用され、平安時代になると一気に増加する。

長方形は4個と少なく、土製と石製が各2個である。

厚台形は84個と大量に出土している。石製が73個と多く、土製が11個である。薄台形は48個で石製が47個、土製が1個である。中期から台形が採用されてゆくわけであるが、最初は薄台形が用いられ、後期前半や後期後半の段階では厚台形が多く採用されていた。この傾向は奈良時代以降になると逆転し、薄台形が多く使用されてゆくようになる。

この段階の特色をあげるなら石製紡錘車未製品の出土である。県内で現在まで54個確認され中央に穴を開けられていない3個以外全て鏑川流域で出土している。

後期後半

59個が出土している。鉄製は4個出土しており、長方形は全く出土していない。薄台形が16個、厚台形は31個、未製品は4個と全体に少量である。これはこの時期の住居数が少ないため、今後住居数の増加と共に紡錘車の数も増えてゆくものと思われる。

奈良時代

179個が出土している。この数は平安時代前期の224個より少ないが、発掘された住居数の割合から見るなら最も出土率の高い時代と思われる。鉄製の紡錘車は5個しか出土しておらず、本格的に使用されてくるのは平安時代以降であることを示している。長方形は12個出土しており、この段階に現在のところ唯一であるが土器の破片を再利用した転用紡錘車が登場している。それは須恵器甕の破片を利用したものであり、このような土師器や須恵器からの転用は、大部分が平安時代になってから行われる現象である。

薄台形が85個、厚台形は55個、未製品が20個と多く出土している。

平安時代

この時期以降鉄製の紡錘車が全体の中で次第に比率を高めてゆくようになる。古墳時代中期に続く第2の

第7章 調査成果の整理とまとめ

大きな変革期である。鉄製は古墳時代後期から奈良時代にかけて平均して3%以下であったものが、平安時代前半になると22%、平安時代中頃では40%、平安時代後半になると47%と次第に他の石製や土製を含む全体の中で比率的に高くなってゆく。

前期

224個が出土している。この数は約100年を時間幅とした時期区分の中で最も多い数となっている。その中で鉄製が49個出土しており、この時期をもって大量の鉄製の紡錘車が使用されてくることを物語っている。長方形は21個出土しており、土器の破片を再利用した転用紡錘車が増加してくる。薄台形は98個、厚台形は32個出土している。薄台形と比較すると厚台形の減少傾向を示している。未製品は8個と少量である。

中期

73個が出土している。平安時代前半に比較すると数は少ないが、発掘された住居数が少ないので、住居に伴う比率では減少していないと思われる。鉄製は29個出土しており、多くの鉄製紡錘車が使用されてくる。長方形は確認されていない。薄台形は25個、厚台形は12個出土している。薄台形と比較すると厚台形はやはり少量である。未製品は確認されていない。

後期

発掘される住居数が少なく、不明な点が多いが総数で17個が出土している。平安時代前期や中期に比較するなら減少しているが、住居数が少ないのであって、住居に伴う比率では減少していないと思われる。鉄製は8個、長方形は3個出土している。薄台形は1個、厚台形は3個出土している。未製品は1個確認されている。

おわりに

以上これまで収集してきた資料と、編年図をもとに簡単な解説をしてきた。今後の調査の進展により、紡錘車の編年が変わる可能性もあるが、基本的にはこのような変化をたどっているものと思われる。今後も別の視点から紡錘車の研究に取り組んでゆきたい。なお今回弥生時代～古墳時代前期の問題に関して、大木伸一郎・友廣哲也両氏にご教示いただいた。

紡錘車に関する研究史やその他の問題については、以下の「紡錘車の基礎研究(1)」と「紡錘車の基礎研究(2)」のなかで詳しく触れている。また編年で使用した報告書については、本報告書中の付表「群馬県内出土の紡錘車一覧表」の中で掲載している。

註 中沢悟 春山秀幸 関口功一「古代布生産と在地社会」『群馬の考古学』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1988

春山秀幸「矢田遺跡出土の紡錘車から」『矢田遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1990

中沢悟 「紡錘車の基礎研究(1)」『研究紀要』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1996

中沢悟 「紡錘車の基礎研究(2)」『専修考古学』専修大学考古学会 1996